



黄連



鹿兒島県立薬草の森で、杉林の木陰に自生する「オウレン」。根茎は苦い健胃薬として使われる。

薬草の森でも植栽成功 武将のストレスも 解消

各地の「花便り」が聞かれる季節。もちろん梅は、桜に先駆けて咲くわけだが、その梅より早くかれんな白い花をつけるのが、雪中に咲く「オウレン」だ。黄連と書く。ひところ、唐黄連と書くと中国から輸入されたが、和黄連すなわち日本産の方が品質は優れている。漢方には横に伸びる根茎を用いる。中国産は日本産と基原植物が違う。

東北・中尊寺の近くに「達谷（たつこく）の洞窟（どうくつ）」がある。いわゆる熊襲（くまそ）族のように中央に従わない部族の根拠地だった。その横の五十年生の杉林の下に、見事なセリバオウレンの群落があり、感動したことがある。

黄連を主役にした処方、黄連解毒湯（おうれんげどくとう）、温清飲（うんせいいん）、三黄瀉心湯（さんおうしゃしんとう）、黄連湯などがある。

ごく最近、「黄連解毒湯はP C 12細胞神経様突起形成作用を有する」という報告が専門誌に載っていた。『黄連解毒湯・当帰芍薬散（とうきしゃやくやくさん）』が、ぼけの予防に優れている」という先年のヨーロッパの学会での発表を裏付けている。ただし、この薬は冷やす生薬群で成り立っているの（昨年十一月十六日付、本欄小川幸男先生）、冷え性タイプには、当帰芍薬散が向くと思われる。使い分けが必要である。

温清飲は、四物湯と黄連解毒湯の合方で（一月十七日付、

本欄松下賢治先生）、乾燥性の肌にしっとり気を与え、炎症で発生したかゆみを伴う皮膚を冷やす。アトピー性疾患の治療の途中で、多用する薬だ。いらいらを抑える黄連が、かゆみの感覚にも関与しているのでは、と考えられる。

不眠で時々頭痛もするという人には、抑肝散加（よくかんさんか）黄連という薬を用いている。筆者の愛用薬に五苓散（ごれいさん）合黄連解毒がある。五苓散は飲み過ぎた水分をさばくし、黄連解毒はアルコールでヒートした消化管を冷やす。むかつき、口の渇き、頭痛によい。酒を飲む前に一包、終わったら一包。絶妙の二日酔い予防の薬となる。

始良郡溝辺町の「県立薬草の森」入口の右手、枝打ちの終わった四十年生の杉木立の下に、セリバオウレンの群落が育っている。南九州で初めての黄連植栽の実験場。今年で十六年になる。